思い草
國學院大學人間開発学部教育実践総合センターだより
第19号
平成28（2016）年2月28日　発行

教員のライフステージのはじめに

人間開発学部副学部長　成田（なりた） 信子（のぶこ）

教員という仕事は一生学び続けるものと言われますが、そのスタートは「養成」を担う大学の学部です。ここ数年、わたしたち人間開発学部でも、教師になるために必要な「知識・技能」「経験」について学生、教員に意識調査をしています。意識調査の回答には大きく分けて二つのニーズが挙げられています。一つめは専門的知識や技能、つまり教え方に関することです。もう一つがコミュニケーションに関することです。

専門的知識や技能の習得の在り方もカリキュラムの中核をしめる問題ですが、コミュニケーションに関することはすべての社会生活の基盤となるさらに大きな課題です。教育実習の事後指導では、今年も学生から子どもたちや先生とのかかわりのことが挙げられていました。例えば、「親しさ」「しかる」ことのむずかしさについてです。高学年で子どもたちのなかにはいっていく気持ちのもちかた、問題が生じたときについ感情的になってしまい後で子どもとうまくいかなくなった事例などが出されました。また、教育実習の担当の先生にどのように指導を受けたらよいのかに思い悩む学生もいます。

人とかかわる仕事のむずかしさを感じるエピソードですが、実習や実習後の振り返りだけでカバーできる問題ではありません。やはり大学一年生のときから人と共に学ぶことでコミュニケーションの在り方について経験や智恵を積み上げてほしいと願います。ここでのキーワードは「主体的に」ということでしょう。つまり「自分から」「意識して」人とかかわることです。人間開発学部一年生には「導入基礎演習」という少人数科目がありますが、同じルームの学生とかかわって学ぶというのは大事なスタートだと考えます。教員のライフステージのはじめとして、まさに大学での学びの在り方が問われているのです。

「頭がよくて頭が悪い人」を目指そう

人間開発学部教授　柴﨑（しばさき）　和夫（かずお）

明治から昭和初期に生きた、寺田寅彦という物理学や地球物理学の分野で業績を上げた東大教授がいました。彼はまた、名随筆家としても知られています。夏目漱石との交流が大きな影響を与えたと言われています。『天災は忘れた頃にやって来る』という文言を残した人として有名ですが、実は彼の著作（随筆）にはこの言葉は見当たりません。内容的には近いことを、友人に宛てた書簡や幾つかの随筆の中で述べてはいます。彼は明治三陸地震、関東大震災、昭和三陸地震（津波等で約3000人の死者・行方不明者）の時代に生きた学者でもあります。

寺田寅彦は数多くの随筆、科学者の目で見て不思議を感じた身近な自然現象についての軽妙な考察、を書いていますが、その中に『科学者とあたま』という、なかなか含蓄のある随筆があります。彼はその中で、結論的に言うと、”科学者は、頭が悪いと同時に頭がよくなくてはならない”と語っています。頭のいい人は、”人より先に人のまだ行かないところ”にたどり着けるけれど、”途中の・・肝心なものを見落とす恐れがある。頭の悪い人・・・大事な宝物を拾って行く場合がある。”のだそうです。

頭のいいひとは批評家に適するが行為の人にはなりにくい。・・・・失敗を恐れる人は科学者にはなれない、とも言っています。また、一つの思い込みによって他の可能性を無視するというのも、頭のいい人がよく陥りがちな罠であると、警告しています。

人間開発学部は、「頑張ることを応援する」学部であると標榜しています。これはまさに、寺田寅彦流にいえば”「頭が悪い人」になることを恐れるな”、ということであると私は考えています。皆さんは恐らく頭のいい人ですから、人間開発学部の４年間で、どうか「頭の悪い人」を目指して愚直に行為を積み重ねることを（たとえ失敗の連続でも）繰り返して欲しい、と期待しています。

教育実践総合センター事業の主な取り組み

本センターは、「教育」「研究」「社会貢献」の三分野における実践研究指導センターとして、教育インターンシップや教育実習等の支援を主に行う「学生支援領域」と、地域の教育関係諸機関や現職教員との連携の支援を主に行う「地域教育支援領域」について行っています。

教育実習・保育実習　学校や園・福祉施設での実習から多くのことを学びました

子ども支援学科の実習が始まりました

子ども支援学科　助教　廣井 雄一

子ども支援学科では、３年次の6月に保育実習Ⅰ（保育所）、８～９月を中心に保育実習Ⅰ（施設）、10月に教育実習Ⅱを実施しました。

各種実習を受けて、12月19日（土）に子ども支援学科３年生を対象にした実習報告会を行いました。履修した学生及び子ども支援学科教員、訪問指導を担当した教育実践総合センターの特任教員が参加しました。第１部では、教育実習２教室、保育実習（保育所）１教室、保育実習（施設）２教室に分かれて、実習の成果と課題について、１人３分程度の口頭発表と質疑応答を行いました。

第２部では、各教室で４～５人程度の小グループに分かれて、第１部での発表の内容を基に討議を行い、実習での体験を共有したり、今後の課題をそれぞれに話し合ったりしました。

第３部では、全員で１つの教室に集まりました。各教室の代表学生が第１部の個人発表や第２部のグループ討議に参加して学んだこと、感じたことを発表し、報告会での討議を振り返りました。最後に、教育実習運営委員の池田、夏秋、神長各教員から次の実習に向けてメッセージがありました。

各種実習を振り返り、今後の課題を明確にした上で、２月15日から多くの学生が保育実習Ⅱ・Ⅲを行っています。今回はそれぞれに担任保育士の指導の下、実習生が担任の役割を担う責任実習を行う予定です。学生が責任実習を経験し、新たな課題を見出し、保育者になる自覚を高めて、大学に戻ってくることを楽しみに待ちたいと思います。

教育実習での学び

健康体育学科　4年　木町 友亮

教育実習を終えて、とても３週間が短く感じました。実習に行く前は、不安と緊張が合わさり、なんとも言えない感情でした。しかし、教育実習が始まると、そんなことを考えている暇がないくらい忙しく大変でした。教育実習を行うにあたって、課題を２つ挙げて臨みました。１つ目は、自分に何ができ何ができないのかを判断し、できないことを改善するために積極的にチャレンジすることで、２つ目は、指導スキルを上げることでした。

最初の１週間は、生徒の雰囲気や反応を知るために、体育以外の授業も参観させていただきました。学年、クラス、科目ごとに生徒の反応も異なるので、とても興味深いと思ったと同時に、それを理解した上で授業構成をしなくてはいけないと感じました。そのために、休み時間などは、毎回多くの生徒と過ごす工夫もしました。

実際に体育の授業実習が始まると、なかなか自ら思い描いている通りにいかず、かつ授業時間が50分と短いので、とても大変でした。何度も試行錯誤を繰り返し、指導教官にもっと良い授業にするためのアドバイスを頂いたりもしました。そこで意識したことは、自ら積極的に何度も指導教官に聞きに行くということでした。ただ聞きに行くだけではなく、毎回自分の考えを伝えることも忘れずにしていました。そして、家でも自分でお手本を見せるために練習をしました。その成果もあり、研究授業では、今までの集大成となるような授業ができました。指導案作成も日々大変でしたが、良い指導案を作成することが目的ではなく、良い授業をすることが目的なので、自分にしかできない授業にしようということを日々考えていました。

以上のように、３週間様々なことがあり、一つ一つ乗り越えていくのは大変でしたが、その先には何とも言えない達成感と喜びがありました。そして何より生徒たちが、夢や目標を持って日々努力し頑張っていたので、私もこの貴重な経験を生かして、今後、夢や目標に向かって努力を惜しまず続けていきたいと感じました。

保育実習　子ども支援学科の保育実習では、保育所の他に福祉施設での実習を行っています

カルボナーラになれ

子ども支援学科　３年　初澤 征也

私は障がい者支援施設で2週間の保育実習を行いました。その中でとても印象に残っている言葉があります。それは実習の最終日に職員の方から言われた「経験と知識を絡めたカルボナーラになれ」という言葉です。これは大学での学びと実習を通しての経験という二つの往還的な学びを意味しており、実際に実習では大学の学びだけでは得難い経験を多くすることが出来ました。

その中の一つとして利用者一人ひとり普通や価値観が違うという事を学びました。椅子を投げなければ次の行動に移れないというこだわりを持った利用者や、一つ一つの物の位置に強いこだわりを持っている利用者、一日の流れや予定が変更になるとそれをすぐには受け入れることが難しい利用者など、一人ひとりに本当に様々なこだわりやルーティンがあり、この中には私たちが普通しないだろうと感じるようなものもありました。しかし、利用者にとってはそれが普通であり、日常なのです。普通というものは一人ひとり異なる事を知り、それが個性であり、価値観なのだと考えさせられました。このように考えが変わったことを、自分の普通というものを相手に押し付けるのではなく、相手の考えを受容する姿勢を身に付けていきたいと思うようになりました。

実際に職員と利用者の関わりをみていると、言葉で伝えても理解することが難しい利用者には視覚的に理解しやすい工夫をするなど利用者一人ひとりに合わせ、寄り添った支援が行われていました。それは長い時間をかけて利用者との関係を築き、こだわりを理解して初めて支援が出来るという事を私に印象付けるものでした。

今回の実習を通して、人と人との関わりが大切な職業なのだと改めて気付かされ、それに対する難しさを感じると同時にやりがいを感じ、実習を通して福祉職への関心が更に高まりました。これから、今回の実習での経験を活かせるように、より一層大学での学びに励んでいきたいです。

教育インターンシップ連絡協議会から　連絡協議会では先生方と学生の交流が深まりました

平成27年12月10日（木）、第２回教育インターンシップ連絡協議会を開催しました。前半に教育インターンシップ報告会、後半に校種別交流会を行いました。幼稚園・保育所実習については、子ども支援学科２年の下山彩華さんと赤羽根真衣さん、小学校実習では、初等教育学科４年丸山雄志さんと健康体育学科２年井田有紀さん、中学校実習では、健康体育学科２年木村勁太さんと渡辺真弓さんの８名がそれぞれの経験をもとにした学びについて報告しました。各園・各校の担当の先生方からの実施状況報告では、鈴ヶ森めばえ幼稚園の大野圭子先生、横浜市立榎が丘小学校の飯野淳子先生、横浜市立奈良中学校副校長の岩﨑健治先生から、実際の学生の活動の様子について温かいコメントをいただきました。

後半の校種別交流会では、「教育インターンシップの経験を教育実習にどのように生かすか」をテーマに、グループ別に意見交換を行い、学生たちは教育現場の先生方から具体的なアドバイスをいただき、学びを深めることが出来ました。

共育フェスティバル　地域の皆様を招いて、アイデアー杯の企画で交流しました

平成27年10月25日（日）、人間開発学部第７回「共育フェスティバル」を開催しました。「共育（共に育ち）」「体温（共に感じ）」「笑顔（共に笑う）」を今年度のテーマとし、学生企画委員会を中心に21の企画を用意しました。

今年度も本学近隣の地域を中心に、1471名の方々にご参加いただきました。「共育フェスティバル」を通して、子どもたちや地域のみなさんとかかわり、学生一人一人が自らの成長を実感することのできた1日となりました。

未　来　塾　開講講座は「10講座」、延べ受講者数は「433名」でした

今年も「未来（みらい）塾」が開かれました。

講　座　名	担　当	開講回数と受講者数
高山真琴先生の「ピアノ講座」	髙山　真琴　教授	
講座１　ピアノ講座		12回開講、延べ受講者数　12名
講座２　幼稚園実習対策ピアノ講座		０回開講、延べ受講者数　０名
講座３　教員採用試験対策ピアノ講座		115回開講、延べ受講者数 181名
講座４　保育士資格取得対策ピアノ講座		14回開講、延べ受講者数　14名
講座５　就職対策ピアノ講座		62回開講、延べ受講者数　62名
原英喜先生の	原　英喜　教授	
講座１　泳ごう、泳げるようになろう！		７回開講、延べ受講者数　34名
講座２　臨海学校見学と小遠泳体験		千葉県南房総市　８月に１泊２日 受講者数　８名
講座３　体育的・集団宿泊的行事としてのスキーを学ぶ		長野県志賀高原　２月に２泊３日 受講者数　４名の予定
一　正孝先生の	一　正孝　教授	
講座１　テニスを学ぼう		20回開講、延べ受講者数　60名
講座２　体育・スポーツ情報を学ぼう		10回開講、延べ受講者数　20名
結城孝治先生の	結城　孝治　准教授	
講座　はったつ・そだち・ほいく		８回開講、延べ受講者数　42名

國學院大學人間開発学部教育実践総合センター
〒225-0003　横浜市青葉区新石川3-22-1　電話：045-904-7711　fax：045-904-7709